

八束水臣津野命の

国引き神話

（高志の都都の三埼・三穂の埼）

「高志の都都の三埼を、國の餘ありやと見れば、國の餘あり」と詔りたまひて、童女の胸鎖取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須々支種振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霧黒葛間耶間耶に、河船の毛曾田毛曾田に、國來、國來と引き來纏へる國は、三種の埼なり。持ち引ける綱は、夜見嶋なり。固堅め立てし加志は、伯耆國なる火神岳、是なり。

「北陸の都都の岬を、土地の余りがありはしないかとみれば、土地の余りがある」と仰せられて、「國よ來い、國よ來い」と引いてきてつなぎ合わせた土地は、美保國であり、引いてきた綱は弓ヶ浜半島、つなぎこめのための杭は大山である。

（北門の良波国・間見の國）

「北門の良波の國を、國の餘ありやと見れば、國の餘あり」と詔りたまひて、童女の胸鎖取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須々支種振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霧黒葛間耶間耶に、河船の毛曾田毛曾田に、國來、國來と引き來纏へる國は、宇波の折絶よりして、間見の國、是なり。

「北方の良波の國を、土地の余りがありはしないかと見れば土地の余りがある」と仰せられて、「國よ來い、國よ來い」と引いて来てつなぎ合わせた土地は、宇波の切れ目からの、間見の地塊である。

（北門の佐伎國・狭田の國）

「北門の佐伎の國を、國の餘ありやと見れば、國の餘あり」と詔りたまひて、童女の胸鎖取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須々支種振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霧黒葛間耶間耶に、河船の毛曾田毛曾田に、國來、國來と引き來纏へる國は、多久の折絶よりして、狭田の國、是なり。

「北方の佐伎の國を、土地の余りがありはしないかと見れば土地の余りがある」と仰せられて、「國よ來い、國よ來い」と引いて来てつなぎ合わせた土地は、多久川の切れ目からの、佐太の地塊である。

（栲衾志羅紀の三埼・八穂米支豆支の御埼）

「栲衾志羅紀の三埼を、國の餘ありやと見れば、國の餘あり」と詔りたまひて、童女の胸鎖取らして、大魚の支太（衝）衝き別けて、波多須々支（幅薄）種振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霧黒葛間耶間耶に、河船の毛曾田毛曾田に、國來、國來と引き來纏へる國は、去豆の折絶よりして、八穂米支豆支（杵築）の御埼なり。かくて堅め立てし加志（杭）は、石見國と出雲國との境なる、名は佐比賣山、是なり。亦、持ち引ける綱は、國の長濱、是なり。

「朝鮮半島の新羅の岬を土地の余りがありはしないかと見れば、土地の余りがある」と仰せられて、「國よ來い、國よ來い」と引いて、引き寄せてつなぎ合わせた土地は、小津の切れ目から杵築の岬までつなぎ止めるために立てた杭は三瓶山に、引いた綱が國の長濱になった。



引かれた国土

島根半島の地形と「国引き神話」

『出雲國風土記』に書かれた「国引き神話」によると、古代の出雲の国は小さくて、足りない部分があるので、補うために四つの地域から土地を引いてきて、今のような形に造ったとあります。これが現在の島根半島にあたる部分です。

島根半島を地形的に見ると、大きな四つの山の塊に分かれていることがわかります。これは、四つの地域が「国引き」によって合わされてきたという、『出雲國風土記』の内容と重なります。詳しくは左ページの図を参照。『国引き神話』はただの空想ではなく、島根半島の地形的な成り立ちを知ったうえで作られた物語なのでしようか。

三穂の埼

美保國町北浦・稻積から松江市手角町にかけての東側の岬で、ここに美保神社がある。

間見の國

鹿島町多久川から美保國町北浦・稻積までを指す。間見の神が鎮座する。

狭田の國

平田市小津から鹿島町多久川の切れ目までを指す。佐太大神が鎮座する。

八穂米支豆支の御埼

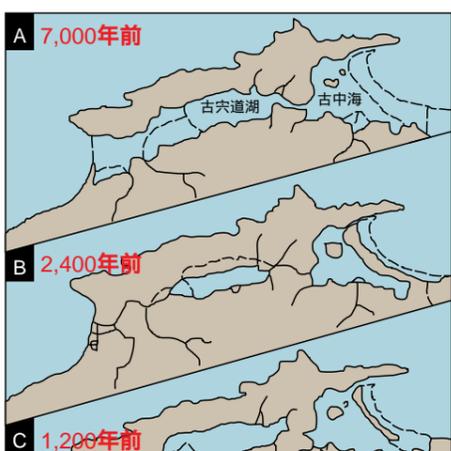
大社町日御崎から平田市小津・平田までを指す。ここに出雲大社がある。

地質学から見た、島根半島の成り立ち

地質学から見た、島根半島の形成過程は大きく、次のように推測されます。

- (A) 七〇〇〇年前、世界的な気候の温暖化により、海面が上昇し、古宍道湖や古中海ができた。
- (B) 二四〇〇年前、気候がやや寒くなり、海面が下がって弓ヶ浜が出現し、古中海は湖になった。
- (C) 二二〇〇年前（風土記時代）、海面が上昇して古中海は湾に戻り、弓ヶ浜の南端部分が海となり、海流が流れ込んでいた。

以上から、島根半島は現在の中海・宍道湖の東部と西部が堆積して成ったことがわかります。これは、「国引き神話」の二つの綱の部分（國の長濱・夜見嶋）の伝承と似ていると言えるでしょう。



写真提供：東海大学情報技術センター